

高校進路指導と学校組織の変容

—都立商業高校のエスノグラフィーより—

風間愛理(お茶の水女子大学大学院)

1. 問題の所在と研究の目的

1990年代以降、フリーターや高校卒業時の進路未定者の増加が社会問題化し、青年期から大人期への移行のあり方が大きく変化しつつある。中でも若者を取り囲む労働市場の変化は大きく、小杉(1998)にみられるように、バブル崩壊以降、新規高卒労働市場は求人数の大幅減、求人職種、事業所規模の変化、企業の採用方針の変化などを経験し、大きく変容している。こういった変化を背景とし、これまで多くの若者を高卒後間断なくスムーズに正規就職へと水路付けていた高卒就職システムは、90年代以降その機能を失いつつあるといわれている(中島2002)。

上に述べたようなマクロな経済・社会的状況の変化は、「職業科よりも普通科」といったように、学校タイプごとの差は論じられてきたが、同一タイプの学校においてはどの高校にも一様に影響を与え、高校が果たしてきた機能の低下を引き起こしたかのように語られてきた。しかし、同地域にある同じタイプの専門高校でも一方でこのような状況の変化にもかかわらず進路決定率100%を維持する高校があり、もう一方で外部社会の変化を受けて従来の進路機能を果たすことができなくなり、進路未定者を多く輩出している学校がある。

本研究は2つの商業高校におけるケーススタディにより、上記のような外部環境の変化に対する学校組織の適応戦略を明らかにすることを目的とするものである。

3. 研究対象と調査方法

(1) 研究対象と調査方法

本研究では、1990年代半ば以降の労働市場の変化に対して、生徒の進路決定率100%を維持しつづけた高校と、進路未定者を多数輩出するようになった2つの都立商業高校(以下、A校:進路決定維持校、B校:進路未定者輩出校とする。)をフィールドとし、インタビューを中心に、学校や進路に関する文書資料の収集、進路関係行事等の観察を行った。

(2) 対象校の概要

2つの対象校は以下のような特徴を持つ。対象校A、Bはいずれも東京都心部に位置し、広範な地域から生徒が集まる高校である。A校は創立80年、全校生徒約600人、男女比約2:8~3:7の学校で、生徒の進路は、大学・短大進学が約20%、専門・各種学校が約20%、就職55%、「その他」(卒業後進学も就職もしない者)は約5%である。B校は創立70年、全校生徒約300人、男女比2:8の学校で、生徒の進路は大学・短大が約10%、専門・各種学校が約25%、就職が30%、「その他」が約35%で、進路未定者を多く輩出している。東京都の公立高校全体においてA校は中下位校、B校は下位校であり、商業高校の中ではA校は上位校、B校は下位校と認識されている。B校では授業料免除の申請をしているものが全校生徒の10%強、外国籍を持つ生徒も多い。A校についても、家庭の経済状況によって進学をあきらめざるを得ない生徒が少なからずおり、家庭的背景に不利な状況を抱えている者が両校において存在すると考えられる。また、A校で退学率が5%以下であるのに対して、B校では卒業時まで2割から3割の生徒が退学する。

3. 分析

ここでは、より「望ましい」就職先への就職機会の獲得を目標に、生徒が成績競争に参加し、学校への積極的なコミットメントが維持され、効率的な進路配分と学校の秩序が保たれるような学校モデルを1980年代の学校モデルと捉え、それとの比較の中で、現在の両校の指導体制がどのような特徴を持つものであるのかを明らかにする。

(1) A校における指導の特徴

<凝集性の強化—「集団」単位の指導とA校の独自性の強調>

A校の進路指導は、進路活動のリーダーシップをとる「進路委員」と呼ばれる生徒を中心に、クラスという「集団」を単位として行われる。

また、A校では「マナーの教育」が重視されており、服装・頭髪に関する細かな規定や話し

方や礼の仕方に関して訓練が行われる。こういった他校に見られない服装や礼儀正しさは、「A校生らしさ」であり、日常的な指導においても「A校生らしさ」に誇りを持つことが常に強調される。こういった「集団」を単位とした指導や他校との差異を強調し、自校の特殊性、優越性を生徒に提示することは、クラス・学校全体の凝集性を高め、進路決定へと動機付けていく指導であるといえる。

<規範的コミットメントの増加—周縁的努力主義の強調と規範的教師—生徒関係>

A校の指導においては「努力すること」が強調される。これは単に就職や進学といった目標を達成するための努力を意味するのではなく、「汗水たらして」、「苦勞する」といったように努力することそのものの価値を強調するものである。こういった周縁的努力が現在のA校において重要な位置を与えられている。

また、A校において生徒は就職のためだけに仕方なく規則や教師に従うのではなく、学校の提示する価値に積極的にコミットし、教師とも親密な関係を築いていた。こういった周縁的努力主義や規範的な教師—生徒関係にみられるように、A校の指導において、学校に対する規範的コミットメントの持つ重要性が大きくなっていくと解釈できる。

このようにA校においては、生徒を競争に駆り立てることで進路決定へと水路づけるのではなく、学校全体の凝集性を高め、学校への規範的コミットメントを強化することで、労働市場の変化に対応しようとしてきたといえる。

(2) B校における指導の特徴

B校は、教師や生徒から「アットホーム」な学校というフレーズで特徴づけられている。現在のB校で行われている指導のあり方を総称する際に、この当事者の用いるフレーズを採用し、「アットホーム」な指導と呼ぶことにしたい。以下でその特徴を説明する。

<「個人」単位の指導>

B校では進路指導に「のってこない」生徒が多いため、生徒全体に対して行われる、スケジュール化された指導が進路指導全体において果たす役割は小さい。指導の中心は生徒一人一人に対する個人指導である。また、頭髪指導をはじめとする生徒指導も、全員にいきわたることは「ありえない」状況で、指導に従わない生徒に対しては、一人一人「追いかけて追いかけて」、

「とことん向き合う」という指導方法が取られる。これは進路指導と生活指導両方に見られる特徴である。

<カウンセリング・サービス業的指導と、声かけの繰り返しによる指導>

こうした個人を単位とした指導はいかに行われるのか。まず、B校における指導は、「カウンセリングやサービス業」的特徴を持つ。進路決定に際して、決定への志向性を持つ生徒の多くは担任や進路担当教諭に相談する。教師は、生徒の希望や現在の成績の状況などから適切な進路を勧めたり、情報を提供したり、それまでに何が必要かを提示する。これは、教師が生徒全体に対して定められた一定の知識、価値などを教授する役割とは異なり、個々の生徒のニーズに合わせてサービスを提供するカウンセラーやコンサルタントといった役割に近いといえる。

また、校則を守らない者や進路に向けた活動をしようとする者に対しては、個人的に「口うるさく」、「とにかく声をかける」指導が行われる。繰り返される声かけの指導に対し、生徒は「自分を心配してくれている」と捉えたり、何度もうるさいから仕方なく「従ったりする。その意味で部分的な有効性を持つものである。

このようなB校における指導は、学業成績による競争に参加しようせず、成績や学校への出席等学校的な価値にこだわりを持たない生徒、学校側の提示するスケジュールに乗って進路活動を進めていくことを自明としていない生徒に対して教師たちが進路決定を促すために発達させてきた指導の方法であるといえる。

4. まとめ

以上に見るように、従来は同一の体制で就職への水路付け機能を維持してきた商業高校は、高卒労働市場の変化を受けて、進路機能の維持、崩壊という点だけでなく、指導体制や組織のあり方そのものを異なるものへと変化したといえる。詳細な分析と考察は当日配布資料にそって行いたい。

【引用文献】

- ・小杉礼子 1998,「高学歴化と高卒労働市場の変化」日本労働研究機構 『新規高卒労働市場の変化と職業への移行の支援』調査研究報告書 No.114 第1章
- ・中島史明 2002,「1990年代における高校の職業紹介機能の変容」『自由の代償/フリーター【現代若者の就業意識と行動】』日本労働研究機構 第5章